

ドレスデナー・フェスト

中村 龍介

毎年、八月になると、東京でも各地の町内会を中心に夏祭りが行われる。商店街に焼ソバやカキ氷などの露店が出て賑わい、盆踊りでクライマックスを迎える。

私は生来お祭りの人ごみはあまり好きではないが、亡き妻はお祭り大好きオバサンだった。夏祭りともなると、自分だけでなく娘たちにも浴衣を着せ、進んで盆踊りの輪の中に入った。この気質は、海外駐在のときも例外ではなかった。

一九七七年、ドイツに駐在した私たち一家五人は、デュッセルドルフ郊外の小さな町に居を定めた。「ドレスデナー・シュトラッセ(ドレスデン通り)」「二十三番地、周囲はドイツ人ばかりで日本人はいない。」

赴任する前からテレビの教育番組でドイツ語の手ほどきを受けていた妻は、早速近くの、誰でも行ける国民高等学校でドイツ語の猛特訓に挑戦。翌年、四女を出産したが学校を辞めなかった。

生まれたばかりの赤ん坊を背中に負ぶって通い続け、一年余りで日常会話をマスターしてしまった。こうなると、女は強い。三人の娘を従え、ベビーカーを押しながら街中を闊歩する肝っ玉母さんの存在感が近所で認められてきた。

一九八〇年の夏、ドレスデン通りの町内会で夏祭りを開催することになった。ドイツ人は、元々お祭り好きだ。夏には各地でフェストが開かれる。フェストの定番はバーベキューにビール。それとお喋りだ。日本のお祭り感覚はない。

この企画に新参のフラウ・ナカムラがクレームをつけた。

「お祭りならパッとやりましょう。私が提灯と花火を手配します。テーブルの設営などは皆さんでお願いします」

覚えたばかりのドイツ語で説明し、皆の賛同を得た。隣人で銀行員のステマー氏が涉外担当を買って出た。

ドイツでは屋外で花火をやるのに消防署の許可が必要だ。ついでに、ドレスデン通りを一部通行止めにする許可も警察からもらった。役所との折衝はステマー氏の仕事だ。

妻は、日本レストラン「日本館」から提灯一式を借り出し、赴任時に持参した花火を揃えて準備万端整える。

「ドレスデナー・フェスト」と名付けられた、お祭りの日がやってきた。

通行止めにしたドレスデン通りにはテントが張られ、バーベキューセット、

テーブル、椅子などが並べられた。料理は各家庭からの持ち寄りだが、妻は大量の巻き寿司を作った。

昼頃から人が集り始め、やがて八世帯、三十人ほどが集合した。子供たちは、親から離れて子供同士でグループを作る。よちよち歩きの四女の康子も仲間に入りたいのか、自分から子供のグループに近づいていく。大人たちは思い思いの椅子に腰を掛け、適当な相手に話しかける。

ドイツ人のお喋りは延々と続く。ドイツ語が苦手の私は、お喋りは妻に任せてスナップの撮影にまわる。退屈すれば、トイレに立つ振りをして、自宅で本を読むのもよい。その点、戸外のパーティは何をするのも自由だ。

通りの外れの空き地では、子どもたちがフリスビーで遊んでいる。サッカーボールを蹴っている男の子もいる。我が家の娘たちは縄跳びをドイツ人に教えている。ゆつくりと時間が過ぎていく。ドイツの夏は日が長い。よく飲み、よく食べ、よく遊び、よく喋っても一向に陽が暮れない。

午後九時、陽が沈み、辺りが薄暗くなるのを待ちかねて、提灯に灯が点る。我が家の玄関が開いて、何時の間に着替えたのか、浴衣姿の妻が手にラジカセを提げて出てきた。

テーブルに置いて、スイッチを入れると「炭坑節」が流れる。妻が先頭に立ち、盆踊りが始まる。後に続くオジサン、オバサンもぎこちない手つきで妻を真似て踊る。更に、その後ろには子供たちが続く。通りに大きな輪ができた。

盆踊りが終わると、ロック音楽のテープが手渡され、ビートの効いた派手な曲に変わる。盆踊りの輪が解け、二人ずつ向き合ってロックを踊りだす。ドレスデン通りが野外ディスコと化した。妻も浴衣姿で腰をひねり、娘たちも見よう見まねで器用に身体を動かす。

ディスコの後は花火。ドイツでは家庭で花火を楽しむ習慣はない。明るい炎が飛び出す度に歓声が上がリ、若者が燃える花火を手に取り出す。子供たちは線香花火の小さな火が作る松葉や柳に目を輝かせる。

夜の十時、子供たちには就寝の時間だ。母親に導かれて一斉に引き揚げる。大人たちはテーブルについて、お喋りの再開だ。空には満天の星。ドレスデン通りのフェストは果てしなく続く。

(了)

〔二〇一八年十月記 原稿用紙約五枚 課題「空」 初稿 二〇一三年八月〕

